

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480-72-3883
振替／東京3-128022
印刷／社会福祉法人 共愛会



1248

絵・中島 英子

きれい！

眠りと夢

(ヨエル書 第二章二十八節)

理事長 福島 勲

前号に書いた「病氣」を承けて、健康について一考して当面する問題に言及してみたい。

若い頃読んだゴリキードだったかの「どん底」の台詞の一説が、心の奥にこびりついている「夜は寝るもんだ」という何の変哲もない言葉である。

若い頃というのは、神学校に入學して間もない頃である。ノイローゼ気味で夜よく眠れないことがあった。

S牧師は眠れないのは信仰が足りないからだ、にべもなく言っただけだった。

わたしはいささかむっとしたが、考えてみればまさにその通りで、文句のいいようがない。

サウル王は、夜な夜な悪霊に悩まされ眠れなかった。神が王から離れられた(サムエル上十六・十四)ということとは王が神から離れたのである。

イエスは荒れ狂うガリラヤ湖上小舟の中で悠然と眠っていた。慌てふためく弟子たちを

信仰が薄いとたしなめられた(ルカ・八・二十五)。

妻のエバを造るため、神はアダムの深い眠りを与えて、肋骨一本を抜き取られた。(創世記二・二十一) それでも眠っているアダムの眠りに神秘的な教訓のあることを感ずる。

大雑把に言って人生の三分の一は眠りである。

しかし、これは怠慢や惰眠ではない。深い眠りは創造的であり生産的で且つ活力である。

それはまた神の業への参画の兆しでもある。

健全な霊肉にこそ健全な眠りがある。健全な霊とは、神へのたしかな信頼の信仰である。

健全な眠りが健全な夢を見る神の注がれる霊によって、老人は夢をみ、若人は幻をみる。

古来ローマ・ギリシャの物語や風俗に睡眠と霊との関わりが多い。総て性に関係づけるフロイド式夢解釈でなく、我々の誰もが一度は夢の神秘を経験し

たことがあるだろう。
しかし、現実には夢などみな
い睡眠が健康的である。
さて、我々は今まで述べてき
たことを、具体的に当面する問
題に置き替えて考えてみよう。

睡眠とは何か。夢とは何ぞ。
端的に言って睡眠とは人間形
成の基本として、神を畏れ神に
信頼をよせることである。

官公庁は施設にあつてこのよ
うなことを言つて欲しくないだ
ろう。しかし今日、一般庶民か
ら大臣に至るまで、法に触れ世
間を騒がせている現実、まさ
しく神を畏れぬ人間の傲慢の現
れである。

すべての者が神に対して敬虔
な姿勢を保つことこそ、我々の
願う眠りといえる。

夢について言えば創立十周年
を迎える我が施設にあつて、単
なる設備の充実完備でも、経営
の発展拡大でもない。

それはひとえに、託された子
どもたちの霊肉の健全な発育に、
職員一丸となつて尽力すること
である。彼らの健全な生育の彼
の時を望みみるのが、われら
の正夢であつて欲しい。

自己実現

施設長 今関 公雄

この七月で開設十年目に入り
ました。園庭の樹木も天高くそ
びえるまでに育ち歳月の重みを
改めて感じます。子どもたちの
成長は更にめざましいものがあ
ります。高校生五、中学生八、
小学生十七となり、心身共に逞
しさを感じる昨今です。

養護実践を省みる時、多くの
欠けを覚えつつも概ね健やかな
生育を与えられており、感謝す
ると共に子どもたちの自ら育つ
力に改めて感嘆しています。ま
た、外見的な心身の成長のみな
らず自己の生を施与されたもの
として捉え直し、未来志向にお
ける自己実現を目指すものであ
つて欲しいと願うものです。

私はいつの頃からか、神様の
宿題としての自己実現という考
え方に気づき、この事を大切に
しています。聖書に「私たちは
神の作品であつて、よい行いを
するように、キリスト・イエス
にあつて造られたのである。」
(エペソ・二・十)との聖句が

あります。

私はこの箇所を、大要次のよ
うな捉え直しをしています。第
一に、私たちが神の作品として
神の似姿に創られたということ
です。しかも、その作られた方
は半製品ともいふべき可能態と
してのそれであります。

第二は、このような半製品と
しての私たちが、生涯を賭けて
神さまに祝福されるような自己
実現を指向するのです。しかも、
ここでは単なる人真似ではなく、
自分らしい自分に成ることが肝
要です。

これらのことは、文字通り生
涯を賭ける一大事業であり、他
者に代替してもらえない崇高な
神さまからの宿題とも言ふべき
ものと考えられます。自分の一
生涯を用いて、自分らしい人間
形成に取り組むこの自己実現こ
そは神の子・光の子としての私
たちの主要な課題といえます。
ここでの基本的な精神は次の
表現によることができます。

「人見るもよし、人見ざるもよ
し、我は咲くなり」「小さきは、
小さく咲くなり」神様は、その
人にふさわしい種子をお与え下
さつたと信ずるとき、自分らし
い花を咲かせることが、私たち
の固有の責務となります。

光の子どもの家の子どもたち
は、それぞれに重荷を背負つて
います。父母の行方不明、家庭
不和による離婚、親の放任や虐
待にあつた者、親の病氣などに
より、十分に養育されなかつた
者などであり、端的に言えば人
間不信を内包していると考えら
れます。このことは情緒不安と
共に否定的な自己評価に陥りや
すいところす。

「私の恵みはあなたに対して
十分である。私の力は弱いとい
ろに完全にあらわれる。」(コ
リ十二・九)との聖句がありま
す。子どもたちがいないものや欠
けたものに目を奪われることな
く、自分に付与された可能性に
着目し、ここでの自己実現のと
りくみに力を尽くす者であつて
欲しいと心から願ひ、祈るもの
です。

エッセイ

子猫の人格形成

県立高校美術教諭 中島 睦雄

猫を十三匹も飼っていると
「ずい分猫好きなんですね。」
と人から言われることがある。
実は、猫好きでも何でもないのである。ただ自然に増えてしまつた、仕方なく増えてしまつたま
でなのだ。

今年の春先までは、親猫三匹
がいた。そのうち一匹がオス。
残りの二匹はメスだが、避妊手
術はしてあつた。それにその二
匹のメスの子猫が二匹、これは
両方ともメスで、合計親子五匹
の猫が、春先にはいた。

ところが、まだ子猫だとばかり
思つていたメスの子猫が、次
第にお腹を大きくしている。初
めの内は、少々食べ過ぎている
と思つていたが、だんだん様子
がおかしくなつて、あれよあれ
よと言う内に、それぞれ四匹の
子を産んでしまった。

まだ子猫だと思つていたのが
甘かつた。
最初に生まれた子猫たちをA

グループとしよう。そして、二
週間ぐらいい後に生まれたのをB
グループと仮に呼ぶことにする。
Aグループ四匹も、Bグループ
四匹も順調に仲良く成長しつづ
あつた。そのうちにAグループ
もBグループもごちゃごちゃに
なつて、A Bの親たちが、どつ
ちでもかまわずオッパイをやつ
ている光景が見られた。どうも
親も子も、どちらが自分の親な
のか、どれとどれが自分の子ど
もなのか、分からなくなつてい
るらしかつた。哀れではあるが、
ほほえましかつた。

或る時、よその雄猫がきて、
家中大騒ぎになつた事がある。
二匹の母猫は、自分たちの子ど
もを守ろうと、必死に抵抗した。
恐ろしい声でいがみ合い、襲い
かかつて戦つた。そんな事をし
て一度は追い返したが、そんな
事件が二度、三度と続いた後、
いつの間にか、子猫が一匹もい
なくなつてしまつた。家の中や

回りを探しても、見つからない。
そのうち、東の家の納屋に白
い子猫がいたという情報を得た
ので、子猫たちを引き取りに行
つた。後から生まれたBグルー
プは、まだ極めて小さかつたから、
何なくつかまえる事ができたが、
或程度成長していたAグルー
プは、もうすばしっこくて、チ
ロチロと物かげに隠れてしま
う。そして、人間を見る目に恐
怖の色さえ感じられた。そんな
訳でAグループの四匹は、素早
くて絶対に捕まらなかつた。
何匹か連れ戻したり、また逃
げられたりしている中に、或時、
全員うち揃つて、ふいに家に帰
てきた。やっぱり自分の家が安
全だと思つたのだらうか、それ
とも、猫たちにとっての召使い
みたいな何人かの人間が、充分
な餌を与えるという点が重要だ
つたのか、私には分からないが、
いずれにしても、全員が家に住
むことになつたわけである。こ
れで、総勢十三匹という訳だ。

学者もどきのつばやき⁽¹⁾

『思い邪あり』

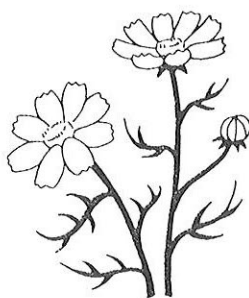
山形大学医学部教授

仙道 富士郎

山形大学第一期卒業生にMという男がいる。今から二十年前、当時私の家によく出入りしていた学生たちは部の顧問をしていた関係で柔道部の学生と麻雀を一緒にやった学生が主であった。M君はそのどちらでもなかったが、どういう訳か、私によくなついてくれた。卒業して山形を離れた後も節目節目に電話をくれ、進路の相談なども受けた。ずいぶんと勤務の病院を変えたと記憶している。医者の世界は妙なところで、この平成のご時世でもまだ、医学部の臨床医学教室（の教授？）が人事権を掌握しており、そのラインに沿って病院を渡り歩かないと、いろいろ不便なようである。M君は最初出身地の九州地方の大学病院に籍を置いていたが、外科の研修が思うように出来ないということで、横須賀の病院に移つて以来、大学の人事の枠を離れ

とを認めなければならぬ。朝、洗顔する度に己の眼を見て、濁りをその中に見つけるのは悲しい。「思い邪あり」が眼に投影されている。珍しく午前三時過ぎまでM君と酒を酌み交わした。宿酔はしたが、いつものいやな心の宿酔は残っていないかった。長崎の病院に一定期間努めた後、九州の離島の医師になるつもりだとM君は言う。彼が素晴らしいのは、そうした生き方を力んで行っているところにある。そうした生き方が好きだから、とごく自然に道に従っていく感じがすがすがしい。

それにしても、私の周囲には眼のきれいな人たちが多い。S君は山形大学の二期生だが、山ひとつ越した小さな町で開業している。高校の教師をしていたが、校長と意見が合わず退職してしまい、医学部に入學し直した男なので、もう大分年をとっているのだが、感性は若々しく、教室の大学院の若い学生諸君の方が彼よりも精神的には老成しているように見えるほどである。ときどき、ランドクルーザーに



養護メモ 51

家族 その四 『情緒4』

菅原 哲男

信夫と祥子の父が突然死亡した。もう二十年にもなるだろうか。その年は三月に雪が降ったような記憶がある。その寒い年度末の出来事だった。

養蜂業で家を空けがちな父とO.Lの母との生活が四年あまりで崩壊しての入所であった。

母は実家に子どもたちをおいて家出したまま、とうとう行方が分からない。祖母の話などから横浜界隈で再婚したという消息をたまに聞くだけで、祖母も娘の話は余りしかなかった。父は旅館の番頭をしていて、そこで結核に罹り、体の不調を訴えて医者を訪ねたときは既に手遅れだったという。

今度の春分の日にお見舞に行こうと子どもたちと約束していたが、その前日に急に病状が悪化して駆けつけるのを待たずにひっそりと亡くなった。死亡の報せが父の実家にも伝えられたが、父は勘当されて戸籍から抹消されていた。しかし、

さすがに祖父は駆けつけて、彼の家の宗旨の真言宗で十人に満たないささやかな葬儀がおこなわれた。戸籍から抹消された子どもの葬儀を暗れ暗れと出来ない祖父は、何かにつけて信夫を前面に出したが、実質的には葬儀を取り仕切っていた。信夫はその時高校一年生で園長が牧師をする伝道所の教会学校に通っていた。迷うことなくキリスト教の洗礼を受ける準備をしていた。信夫は職員と激しいトラブルを起こして、父母と暮らした焼津に走り、記憶をたどって父の弟の家を探し当てた。施設からほど遠くない町で旅館の番頭をしていた父の所へ叔父と行き、数年ぶりで再会したものである。数日後、信夫はうなだれて父と施設に戻ってきたのだった。父よりも年若い職員たちに自分代わって白髪を焼きたれて謝る姿が信夫の目に焼き付いた。そのことが彼のその後の行動や考えに強烈な影響を与えた。

養護施設の働きは、家族に代わって子どもたちに関わり、家庭のような暮らしをつくり、出るだけ情緒を養い、生活や人間関係の技術や知識を身につけて社会に送り出すことである。信夫にとって養護施設とは何であり、そこで働く者たちとは一体、何者だったのだろうか。五〇〇〇日有余の日々を必死に関わり続けてきた養護施設で

トムソーヤたちの朝

日本キリスト教団東大宮教会

永野三恵

「おはよう。」「おはようございます。」

日曜日の朝、元気の良い子どもたちの明るい声と共に教会が、生き生きと活気を帯びてくる。

今年の夏の様にどんなに暑い時も、又、雪が降って『こんな日はとても来れないだろう』と思っている時でも、バスから元気の良い子どもたちが賑やかに降りて来る。

いつもニコニコしている子。すばしっこく走り回る子。「ネー、ネー、」と、人なつっこく話しかけてくる子。無口な黙ってボソッと座席に座る子。ひとりひとりの顔を見ながら、この一週間も無事に守られ、共に礼拝できることを先ず感謝する。東大宮教会の教会学校教師として『光の子どもの家』の子どもたちと付き合ひ始めて既に九年余りの刻が経っている。

私の中に、九年の歳月がもたらした子どもたちの変化、成長を思う気持ちと、現在この時、毎週、毎週礼拝を守る交わりを通して与えられる新鮮な驚きと発見が錯綜する。

初めて、三〇名の子どもたちを迎えた教会学校は、教師も子どもも、パニック状態だった。神さまから、一度に三〇名の子どもたちをプレゼントされたにもかかわらず、教会も教師たちもその大切なプレゼントが、余りにも大きく、自分たちの今までの尺度で測りきれず困惑し、なす術を知らなかった。

又、ひとりひとり各々の過去を背負ってきている子どもたちも、何をしに教会へ来ているのか、まだ解らなかつた。

『絶対的な存在者の前に頭を垂れる』『聖書のみ言葉に耳を傾ける』こうしたことを守るために、ともすれば、静かに礼拝を守るようにと、教師たちの大きな声が響く時もあった。

腕白盛りの子どもたちは、ちっともじっとしていない。興味のある事をすぐその場で実行しないと気がすまない。ちょうど三〇名のトムソーヤが一堂に会した趣があった。

悪戦苦闘の毎週でありながら、やはり子どもたちは確実に養われていった。

その背後には、光の子どもの家の職員の方々の熱い思いと、祈りがあつた。若い職員たちが、子どもたち一人ひとりを見つめ、家族の役割を担ひ、成長を願い見守っているその真摯な姿には、いつも頭が下がる。

また、『子どもたちがやがて社会に出ていくときがやってくる。その時までに信仰を持って欲しい』『与えるものはひとつ。信仰を！』そうした職員の方々の熱い思いが、びんびん伝わってきた。

ほんやりと人生を送ってきたしまった私などより、ほんの僅かな人生の間に、もっと多くの人間の醜さ、大人たちの罪深さを経験してきている彼らには、神さまが、ずっと近くにいて下さる気がする。

子どもたちとたくさん思い出があるが、彼らが天使に変わったその時の驚きと感激を、私は忘れることが出来ない。

それは毎年のクリスマスに行われるページェントの時である。どの子も神さまの光に照された輝きがあり、静かな中に、豊かな愛に満たされた平和があつた。

一九九二年のクリスマスには、職員、教会学校の教師たちの祈りに神さまは応えて下さり、最初の受洗者が与えられた。これは本当に大きな喜びであつた。毎週たつた一回、それも一時間と、子どもたちとの交わりは、家庭、学校で共に過ごす時間からみれば本当に僅かである。しかし、教会で共に過ごす時は、他のどこでも得ることの出来ない貴重な時である。

彼らが成長し、思春期を迎え、悩み、大人になつていく過程で、どんな嵐が吹こうと、時代の流れがどんなに変わろうとも、変わることをない神を信じ、ひとりひとりに注がれる愛によつて生かされている確信を持つて生きていくと、心から願っている。

現場から

幸せであるように II

白石 輝雄

光の子どもの家で迎える二度目の夏はとてつもなく暑かつた。

この春から最も多い人数の六年生五人のグループ活動の担当となる。この五人の「よき兄貴分」になれば指導員としての仕事を果たせる、と激励され、手強いグループと苦楽を共にすることになった。個性的な粒ぞろいの五人です。多くの課題の中でも、男の子三人の関係の修復と連帯感の形成。

夏休み前の会議で、この休み中の行事について、子どもたちに「夏休みは、だまっていでもどこか連れていってくれる。」という意識が強い。訂正も計画に加えることを確認した。

人に喜ばれるような家の手伝いをし、計画は自分たちで練り実行しようと話し合ひから始める。夏休みの宿題と復習予習をきちんとやれるように毎日の朝の時間に一緒にすること、庭の草取りや掃除、自転車置場の整理などで、お小遣いをもらい、

それを費用に充てるという計画になった。

目的は意見が分かれたが、今年も長野県の小海町にある(株)フリックの山荘をお借りし、そこをベースに赤岳を越えて反対側の赤岳鉱泉に宿泊する。

このグループのリーダー的存在の擢也は、数年前からの母親との関わりの結果、夏休みの帰宅訓練次第で、生活の見通しが得られれば引き取りが実現するという状況にあった。

子どもたちは暑い暑い中を本当によくがんばつた。自転車が倒れていたり散乱していると、六年生の誰かが気がついて、少しづつづつ言いながらも整頓し、園庭の一部分がいつもきれいに保たれた。

七月二十六日朝、女の子二人と他の低学年の子どもたち五名と職員たちと荷物のバスとは別に三人の男子とヘルパーの高校生は車で出発。一足先に山荘について、布団を干したり掃除をし

たり、生活ができるように準備。リーダーの高校生のいうことをよく聞いて一生懸命がんばつた。

二日目、いよいよの日。六年生は二八九九Mの赤岳に長野山梨県境ルートから迫る。低学年の目標はそのルート途中の二四四五Mの犬天狗だ。

どちらも大切な位置の先頭に擢也、しんがりやを六年生の将司。その間に女の子や低学年を並べ、所要所要に六年生の勇や高校生の悟君と職員。砂利道から熊笹の道、岩場と様々な顔を見せる道をのぼり抜け昼食前に犬天狗に到着。昼食が終わると同時に驟雨がきた。昼食を素早く片づけ苦闘が始まる。

かぶさるように迫る赤岳の山頂へ伸びる千Mに点々と続く鎖場・その手前で雨は止んだ。しかし、濡れた鎖場は滑落しやすい。引き返すことも考えたが、よく注意をして挑むことにした。

去年は泣きわめいた漢子も時々悲鳴をあげながら鎖にしがみつく。「鎖を固く握め！」擢也が怒鳴る。「ここ危ないから気をつけろ！」将司が注意する。「ほら、手を握めよ。」勇が手

を貸す。大人たちの手を殆ど借りず山頂に立つ。バンザイ！雨がドシャ降る中をボンチョ姿の一行は鎖場を降りる。どんな顔に疲れが重なる頃、ようやく鉱泉に到着した。山小屋の一夜は疲れを吹き飛ばした。

サヨナラ夏休みパーティー。夏休みの思い出と共に、擢也とお別れの日だ。パーティーの終わる頃、誰言うともなしに子どもたちは向き合つて列を作り、帰る擢也と母に花道をつくつて送つた。「がんばれよ！」「お前もなっ」「ありがとう！」擢也のよく透る声が園庭に響き二人は車に。手を振つて見送る皆を擢也は後ろ向きに見つめた。駅について改札口の別れ際、擢也との出会ひや思いがかけ廻る。

「がんばれよ」何と月並みな言葉だ。体を前のめりにして母との生活に希望を見出した擢也は、母の後を追ってホームを駆け出し出発した。素敵な笑顔の残像を残して闇の中に尾燈が消えた。私は動くことができず、無人の改札口で、こみあげる熱いものを感しながら、新たな思いを抱く自分に気づかされていた。

日誌抄

五月一日
六月末日まで

五月一日 長い事学習ボランティアをして下さり、卒業された原麻美氏よりお励ましを。

四日 第九回子どもまつり。

子どもたちの手作りの模擬店やゲーム、奇術などに五〇名余の地域の子どもたちが集まり、飯田洋司さんのアルトサックスと秋山寿子さんのピアノの合奏が光る風のように子どもたちを包み、荒巻幸子さんの手品と腹話術のケンちゃんと掛け合いで楽しんだ一日。

十二日 吉田孝子氏より「子ども世界」を今月も。感謝。

十八日 ホザナ園より見学に。

〇第一回バザーの宣伝ポスター貼りとはビラ配りをこの日から。

二二日 バザーを明日に控えその準備にしずくの会と東京家政大学の有志が。値段付け、展示の仕方や心構えなどのノウハウなどを指導下さる。

二三日 第一回バザー実施。よく晴れた皐月の強い日差しのおかげ、宣伝も展示も、何もかも行き届かないバザーに、後

援会の役員の方々も駆けつけて、たくさんの方々に来て下さり、賑わう。収益も五二万円余で、最初にしては大成功。ご協力下さった皆さまに心から感謝。

二六日 小学校家庭訪問開始。

施設臭さや集団の特性をなるべく除去した生活をつくっているつもりでしたが、先生たちのご苦労が・・・。

二七日 後援会総会。

二八日 第三九回理事会。事業報告・決算案など審議・承認。

二九日 地元十軒下組より立派な漆器をいただく。感謝。

五月二日 中学校家庭訪問開始。

思春期まったただ中の八名の、家では見せない意外な顔などを伺い、夏休みや進路に向けて方向を確認。ありがとう。

五日 日本キリスト教団東大宮教会壮年会より、今年も高校進学資金のお支えを。毎月。

六日 第一回バザー反省会。しずくの会、後援会から一五名ほどが。今年の反省点を出し

合い来年の実施を確認。

〇俳句結社『浮野』（落合水尾主宰）より来訪してお励まし。

十五日 共栄女子短期大学で菅原が講演。

二〇日 東京銀座ベンチャーズクラブよりお励ましを。感謝。

二二日 町内秋間儀平氏より剣道具一式を。感謝。

二六日 ゼンプランテーションより野菜をたくさん。感謝。

〇女子聖学院短大遠藤正代氏よりサクランボをたくさん。

〇本誌にエッセイの連載など熱烈ご支援の中島陸男先生より飲み物の陣中見舞いを。感謝。

二七日 江森ヘヤーサロンより調髪のご奉仕。毎月。感謝。

二八日 慈恵医大付属看護学校で菅原が講義。

三〇日 鹿兒島聖母天使園より上原康祐指導員来訪。見学と交歓の一泊二日。（くら）

〇一九九五年度も職員確保のためのバザーを行います。それに向けて、蔵出し品などのご協力をよろしくお願いします。

送り先は光の子どもの家気付。

バザー実行委員会

反射光

☆何とも暑い夏でした。園庭の草木も葉が焼け

たり萎れたり、制限されている水道や池の水を汲んで水やりをしながら、こちらが日射病にやられそうでした。☆そんな夏もたくさんの方々のご厚意とお励ましでいつもの年を越えて素晴らしい経験が積み重なりました☆夏の行事のペースになっていた（株）フリックの山荘が経営難で行き詰まっているそうです☆この山荘は、永原兼太社長が、企業の社会的責任として、大人の責任で施設で暮らさなければならぬ子どもたちに、静かで涼しい八ヶ岳の高原でひとときを過ごさせることを思い立ち十年前二百余坪の土地に山荘を建て、数カ所の養護施設に利用料を徴らずに貸与してきました☆私たちも数年前からその恩恵に浴して、八ヶ岳登山のベイスやその土地の芸術家たち、お百姓さんたちとの交歓の時を得ています。子どもたちの夏の思い出と共に心の故郷になっています。何とかならないものかと、心配しています。（哲）